第 11 講　日本の近世思想

1　儒学―中国の学問―

①朱子学

鎌倉～室町時代に日本に伝わった**朱子学**は，臨済宗の僧らに学ばれた。**江戸幕府**は，幕藩体制の秩序維持，すなわち**各身分間や身分内での上下関係の維持にこれを利用**した。

※３代将軍徳川家光までは武断（ぶだん）政治であったが，４代家綱以降は武力に頼らない文治（ぶんち）政治に転換した。５代綱吉は，半官半民の聖堂学問所を設置し朱子学を興隆させた。

※ 11 代家斉（いえなり）治世下の「**寛政（かんせい）異学の禁**」以降，朱子学は正式に官学となり，官吏（かんり）登用試験も朱子学に限られていった。

A　**京学**

1　**藤原惺窩（せいか）**（1561 ～ 1619 年）→もと相国寺（しょうこくじ）（京都）の僧

朱子学を仏教から分離し，日本に広く定着させる端緒（たんちょ）を開いた。彼は，仏教の非現実的で世間離れした性質（＝出世間性（しゅっせけんせい））を批判し，身近な世俗の生活や出来事こそが真実であり，人間の生きるべき場であるとした。

※徳川家康から江戸幕府の儒者として勧誘（かんゆう）されるが断り，弟子の林羅山を推薦して生涯仕官せず，京都で人生を終えた。彼の創始した学派を**京学〔京学派〕**という。

2　**林羅山（はやしらざん）**〔道春（どうしゅん）〕（1583 ～ 1657 年）→もと建仁寺（京都）の僧

天と地に高低の差があるように，人間も生まれつき身分の上下が決まっていると説き（＝**上下定分の理（じょうげていぶんのり）**），身分制度を正当化して幕藩体制の秩序確立に貢献した。また，身分をわきまえ心につねに**敬（けい）**〔つつしみ〕をもち続け，私利私欲を断った態度を**存心持敬（そんしんじけい）**と呼び理想化した。

※林羅山の子孫は「林家（りんけ）」と呼ばれ，孫の林鳳岡（ほうこう）〔信篤〕以降は聖堂学問所（のち昌平坂（しょうへいざか）学問所）の責任者（＝大学頭（だいがくのかみ））として，幕府の朱子学を牽引（けんいん）した。

3　**木下順庵（じゅんあん）**（1621 ～ 1725 年）

林家とは別系統から出た京学の朱子学者で，加賀藩前田家や５代将軍綱吉に仕えた。

※ 新井白石（あらいはくせき）・雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）・室鳩巣（むろきゅうそう）らの師。

4　**新井白石**（1657 ～ 1725 年）

６代家宣・７代家継の侍講として，「正徳の治」と呼ばれる政治改革を行った。

※『読史余論』『折たく柴の記』などの著者として有名だが，日本に潜入し捕えられたイタリア人宣教師シドッチとの対話に基づき，『**西洋紀聞**』なども著した。

5　**雨森芳洲**（1668 ～ 1755 年）

対馬藩の宗氏に仕え，朝鮮との外交業務を通じ，異文化への積極的理解を説いた。

※朝鮮通信使待遇問題をめぐり，兄弟子の新井白石と対立した。

6　**室鳩巣**（1658 ～ 1734 年）

加賀藩前田家や徳川将軍家（６～８代）に仕える。特に８代吉宗の侍講として，民衆の教化などに功績を上げた。

B　**南学**

1　**谷時中**（1599 ～ 1649 年）

戦国期の土佐国で**南村梅軒**が始めたとされる教えを引き継ぎ，江戸時代初期に**南学〔海南学派〕**として確立。山崎闇斎らの師。

2　**山崎闇斎**（1618 ～ 82 年）

朱子のいう居敬（＝心をつつしむ修養）の厳格な実践を説き，林羅山ら**林家を批判**した。また，儒教と日本神話を結合させた独自の神道説である**垂加神道**を唱えた。

※京都に塾を設け，佐藤直方ら多くの門弟を養成して「崎門学派」を創始した。

3　**佐藤直方**（1650 ～ 1719 年）

従来の儒学者が日本の神々を中心に考えてきたことを批判。朱子のみを尊び，窮理（＝家や国家を超えた宇宙の理法を考える）に専念すべきと説いた。

※結果的に師の山崎闇斎を批判することになったため，**浅見絅斎**とともに破門された。

C　朱子学を基盤としたその他の思想家

1　**貝原益軒**（かいばらえきけん）（1630 ～ 1714 年）

薬草など動植物を研究する本草学者の一方で，日常道徳をわかりやすく説くなど, 朱子学を生活に活かす試みを行った。主著は『大和本草』『養生訓』。

2　**三浦梅園**（みうらばいえん）（1723 ～ 89 年）

懐疑（かいぎ）的な態度で世界のあり方を問い，理や気など朱子学の考えを用いて自然の法則を明らかにしようと，独自の条理学を構築した。主著は『玄語（げんご）』。

※当時では他に類を見ない，自然科学的な学風。

3　**富永仲基**（とみながなかもと）（1715 ～ 46 年）

のち準官学扱いとなる町人塾，**大坂**の**懐徳堂**（かいとくどう）に学ぶ。仏教・儒教・神道を鵜呑（うの）みにするのではなく，それぞれの成立過程から思想史上の意義を相対的に見ることを説いた。

※思想の発展には「新しい言説は，後世の人が付け加えたもの」（＝**加上**（かじょう））という法則があるから，仏教・儒教・神道の発展過程は，批判的に明らかにすべきと説いた。主著は『出定後語（しゅつじょうごご）』。

4　**山片蟠桃**（やまがたばんとう）（1748 ～ 1821 年）

懐徳堂に学び，地動説に基づく独自の宇宙論を展開した。当時としては珍しい合理主義的観点から，霊魂（れいこん）の存在を認めない唯物論（ゆいぶつろん）的思想の無鬼論（むきろん）〔無神論（むしんろん）〕を説いた。

②陽明学

16世紀初め，明の王陽明が朱子学を理論偏重だと批判して実践的な**陽明学**が現れたが，同様の展開が，17世紀前半の日本でも起きた。

A　**中江藤樹**（1608～48年）**→日本陽明学の祖**

儒教が重視してきた親に対する**孝**を，全ての人間関係，さらには万物の根本原理とした。彼は**「愛敬」**（＝真心をもち人に親しみ，上を敬い下を侮らない心）を孝の本質とし，朱子学の外面的な「敬」（＝つつしみ）を批判した。そして，孝は形式にとらわれることなく，全ての人間が**時・処・位**（時期・場所・身分）に応じて実践すべきであると説いた。主著は『**翁問答**』。

※中江藤樹はもと伊予国（愛媛県）大洲藩の著名な朱子学者であったが，年老いた母の面倒を見るため脱藩。故郷の近江国（滋賀県）へ戻り，藤樹書院という塾を開き熊沢蕃山らを指導したことから「近江聖人」とも呼ばれる。

B　**熊沢蕃山**（1619～91年）

「治国平天下」という儒教の理念を，現実との関わりの中で考えた。たとえば，樹木を切り尽くすと山の保水力が乏しくなり水害が起きるので山林を保護すべき，と主張し，日本の環境保護の先駆けとなった。

※岡山藩池田家の家老となったが，著書『大学或問』で幕府の参勤交代制を批判し，下総国（茨城県）古河に幽閉され，そこで亡くなった。

C　**知行合一**の実践

陽明学は，社会の中で恵まれない人々を救済するための直接行動の理論を提示していった。19世紀の**大塩平八郎**（＝1837年，大塩の乱）・**吉田松陰**（＝幕末，尊王攘夷運動）・**西郷隆盛**（＝1877年，西南戦争）らは陽明学を修めていた。

※日本の陽明学は，儒学を万民の学問に広げたとされる。身分制度を否定してはいないが，道徳を実現することにおいて万民は平等であるとした。

③古学(こがく)

仏教や老荘思想〔道教〕の影響を受けて後世に現れた**朱子学などの新しい儒学を批判**し，**孔子・孟子の原典やそれ以前の思想に帰るべき**，と説く学問を**古学**という。

※ 朱熹(しゅき)〔朱子〕らが著した解説書に頼らず，古代中国の言葉や文法を学んだ上で，原典からその思想を読み解くことを重視した。

※江戸時代の儒学には，朱子学・陽明学・古学の他に，それらを混合した折衷学(せっちゅうがく)や，客観的な文献考証(ぶんけんこうしょう)を行う考証学もあった。

A　**古学派〔聖学(せいがく)〕**

山鹿素行(やまがそこう)（1622 ～ 85 年）は，朱子学の実践に欠ける側面や抽象性を批判し，初めて**古学**を提唱して**聖学**と名付け，孔子の教えを学ぶことを説いて『**聖教要録(せいきょうようろく)**』を著した。また，名を求め恥を知る，という心のあり方を重んじる中世的気風の「武士道」を批判して，儒学に基づく近世的な**「士道」**を説き，武士は道徳的指導者になるべきであると主張した。

※彼は，天下統一後の平和な世における武士は，理想的な人の道に努め，その道を乱す者があれば速やかに処罰する役割をもつと考えた。そして士は，農・工・商の三民を倫理的に導く**三民の師**としての自覚と責任をもつべきだと説いた。

※これに対し，肥前藩（佐賀県）の**山本常朝(つねとも)**（1659 ～ 1719 年）は『**葉隠(はがくれ)**』を著し，死を覚悟して主君に仕える**「武士道」**の姿勢を説いた。彼は，武士の本質は潔く命を捨てることにあり，たとえ平和な世でも，常に死を覚悟して毎日を送らねばならない，と考えた。

B　**古義(こぎ)学派〔堀川学派〕**

伊藤仁斎(じんさい)（1627 ～ 1705 年）は，日常的な欲望や感情はやむを得ない自然なものである，と考えた。中国古代の聖人(せいじん)は，人々が誠実に互いを思いやる**「仁(じん)・愛(あい)」**に満ちた関係を理想として説いているのに，善悪を厳しく問い詰める朱子学では冷厳(れいげん)な人間を養成してしまう，と批判した。そこで彼は，『論語』『孟子』の原典に立ち返ること（＝古義）を訴え，**真実無偽(むぎ)**の心として**「誠(まこと)」**の重要性を主張し，他者に誠を尽くすことにより，自己は浄化(じょうか)されると説いた。

※「仁」とは，人々に満たされている「愛」であり，それを実現すべきものと教えている『論語』こそが「最上至極(さいじょうしごく)宇宙第一の書」と考えた。そして，その「愛」こそ拡充すべき実(じつ)の心であり，人々が孔子の道に立ち

戻り，他者に対し「**忠信**」（＝自分を偽らず誠実に対応すること）に努めるならば，互いに愛し親しむ和合が実現する，と説いた。

※伊藤仁斎は，**京都**堀川に**古義堂**という塾を開き，それは子の**伊藤東涯**（1670 ～ 1736 年）が引き継いだ。主著は『**童子問**』『論語古義』『**語孟字義**』。

C　**古文辞学派〔蘐園学派〕**

荻生徂徠（1666 ～ 1728 年）は，５代将軍綱吉の側用人柳沢吉保，のち８代吉宗に仕え，**江戸**に**蘐園塾**を開いた。彼は，孔子・孟子より遡る古代中国の聖人・聖王がつくり上げた「**先王の道**」とされる制度（＝礼・楽・刑・政）こそが重要であり，朱子学のように画一的な心の修養を求めるより，制度を学び実践したほうが社会全体として効果が高いと説いた（＝**安天下の道**）。そして，学問の本来の目的は，自己の修養だけでなく世を経め民を救うこと（＝**経世済民**）とした。このように，個人の人格形成より社会制度に目を向けることを考えたとき，古代中国の制度は当時の言語・文献で理解すべきとし，その研究法である**古文辞学**を主張した。この考え方は，のち国学や歴史学の方法論にも影響を与えた。主著『**弁道**』『**弁名**』『**政談**』。

※彼の**経世家**（＝政治経済学者）の側面を継承した弟子として，『経済録』を著した**太宰春台**がいる。また，儒学からの漢詩文の独立に尽力した弟子として，**服部南郭**がいる。

２　国学―日本の学問―

国学は，仏教・儒教・道教などの影響を受けない日本固有の思想（＝**古道**）を研究する学問。具体的には日本の古典や神道の研究を行う。

A　**契沖**（1640 ～ 1701 年）

真言宗の僧。日本人の心を伝える文献であるとして『万葉集』を研究し，『**万葉代匠記**』を著す。

※外来思想を排し，古代日本人の精神を学ぶべきと主張した。

B　**荷田春満**（1669 ～ 1736 年）

伏見稲荷（京都）の神官。古典研究の基礎を築き，日本の古代精神を明らかにしようとした。弟子に賀茂真淵がいる。

※晩年，著書『創学校啓』の中で，８代将軍吉宗に対し国学の学校建設を訴えたが，認められなかった。

C　**賀茂真淵**（1697 ～ 1769 年）

遠江国（静岡県）浜松の神官。儒教や仏教が入ってくる以前の古代精神（＝古道）の存在を，『万葉集』の歌論に展開した。**「ますらおぶり」**（＝男性的，素朴で力強い）に日本的心情の典型を見いだし，大らかでありのままを重んじる**「高く直き心」**を理想とした。主著『**国意考**』『**万葉考**』『歌意考』。

※弟子には本居宣長や，『群書類従』編纂者の塙保己一がいる。

D　**本居宣長**（1730 ～ 1801 年）

伊勢国（三重県）松坂の医師。地元を旅行中の賀茂真淵の宿を訪ねて一夜を語り明かし，以後は手紙のやり取りのみで教えを受けた。師の『万葉集』研究に対し，『古事記』の研究に生涯取り組んだ。彼は，日本人は，仏教や儒教が入ってくる以前の世界を知らねばならず，神の道に従う生き方である**惟神の道**〔古道・大和魂〕を追及すべきである，と説いた。その道は，良くも悪くも生まれついたままの**真心**で，**漢意**（＝仏教や儒教のように，理屈で道を捉えようとする精神）を捨て，そこに立ち返るべきとした。主著『**古事記伝**』『**源氏物語玉の小櫛**』『**玉勝間**』。

※本居宣長は，師の賀茂真淵が批判的であった『古今和歌集』などの平安文学に見られる**「たおやめぶり」**（＝女性的，繊細で優美）も評価した。

※彼は，日本の和歌や物語の本質を，揺れ動く感情を描くことにあると捉えた。物事に触れたとき最初に感じる素直な感嘆の**「もののあはれ」**こそが純粋な心の動きであり，人間はこれにより物事の本質を知っていく，とした。

E　**平田篤胤**（1776 ～ 1843 年）

出羽国（秋田県）の武士。本居宣長の死後，その著書に影響を受けて没後門人を自称した。古来の純粋な神道の姿を求めて国学を神学化し，**復古神道**を提唱した。主著『霊能真柱』『古道大意』。

※彼は，日本〔大和〕民族は他民族に対して優位であると強調し，天照大神を祖先神とする天皇への服従を説いた。その教えは民間にも広まり，幕末の尊王攘夷運動に多大な影響を与えた。

３　民衆思想

①元禄文化の三大作家

A　**井原西鶴**（1642 ～ 93 年）→上方（＝京都・大坂）の**浮世草子作家**

この世は「浮き世」であり，日常の中で快楽や富を追及することにこそ，人間のありのままの姿がある，と現世を大胆に肯定した。主著『好色一代男』『日本永代蔵』『世間胸算用』『武家義理物語』など。

B　**松尾芭蕉**（1644 ～ 94 年）→伊賀国（三重県）出身の**俳人**

「さび・しおり・細み・軽み」を重視し，一種の言葉遊びにすぎなかった俳諧を芸術の域にまで高めた。俳諧紀行文『奥の細道』『野ざらし紀行』など。

C　**近松門左衛門**（1653 ～ 1724 年）→上方の**脚本家**（人形浄瑠璃・歌舞伎）

義理と**人情**の葛藤を主題に，「憂き世」を生きる人々の美しさを描き，空前の人気を得た。代表作『**曽根崎心中**』『国姓爺合戦』など。

②民衆思想

A　**鈴木正三**（1579 ～ 1655 年）

もと旗本。のち禅僧となり仏教復興を志す。著書『万民徳用』で，武士・農民・職人・商人のいずれもが，自らの生業を通じ仏になれるという「**職分仏行説**」を唱えた。

※いかなる職業も上下の区別なく神聖で，それに専念すれば仏行になる，とした。

B　**西川如見**（1648 ～ 1724 年）

長崎の商家に生まれる。天文・暦・算・地理・経済などに広く通じ，晩年は８代将軍吉宗から江戸に招かれた。平等の人間観から町人・百姓生活の積極的意義を唱える『町人嚢』『百姓嚢』や，長崎で見聞した海外事情・通商関係を記す『華夷通商考』で有名。

C　**石田梅岩**（1685 ～ 1744 年）

京都郊外の商家に生まれる。実践しやすい道徳として**正直**と**倹約**の実践を唱え，それまで低く見られていた商業に社会的な存在意義を与えた。商いによる利益の追求は正当な行為であるとし，町人道徳である**心学〔石門心学〕**を創始した。主著『**都鄙問答**』。

※彼は，**身分制社会は否定せず**，各身分の果たしている役割には貴賤の違いがない，とした。だからこそ，人は身分やそれぞれのもち分に満足して暮らすべき，と考えた（＝**知足安分**）。

※弟子の手島堵庵は京都に明倫舎などの学校を開き，心学を広めた。

D　**安藤昌益**（1703 〜 62 年）

陸奥国（青森県）八戸の医師。**身分制社会を否定**し，全ての人が田畑を直接耕して（＝**万人直耕**）自給自足する平等社会を「**自然世**」として理想化した。そして，農民から搾取する武士・職人・商人・僧侶・神職など**不耕貪食の徒**が存在する差別社会を「**法世**」と呼び批判した。主著『**自然真営道**』『統道真伝』。

※彼の著書は，思想統制が厳しい江戸時代にほぼ読まれることはなく，明治時代に発見された。

※戦後, 駐日カナダ大使ハーバート＝ノーマンの著書『忘れられた思想家』で取り上げられ，国際的に話題となった。

E　**二宮尊徳**（1787 〜 1856 年）

相模国（神奈川県）小田原藩の農家に生まれる。天地や他人からの恩（＝徳）に報いる具体的実践法（＝報徳仕法）として，経済力に応じて生活設計を立てる**分度**と，倹約して発生した余裕を蓄え，他人に貢献する**推譲**を説いた（＝**報徳思想**）。各地で農業指導者として改革に従事してめざましい実績を上げたことから，のち幕臣に採りたてられた。弟子が語録『二宮翁夜話』を編纂。

※彼は，農業は自然の営みである**天道**と，人間の働きである**人道**の両者が相まって成立していると考えた。

※二宮尊徳は幼名を金次郎といい，薪を背負い読書する像が小学校などに現存する。戦前の日本では,「孝」を重視した中江藤樹と並ぶ模範的な日本人像として，修身教育で積極的に取り上げられた。

４　洋学〔蘭学〕―西洋の学問―

鎖国下の日本では，西洋との交流は，長崎の出島における**オランダ**との貿易に限られた。東インド会社の日本支店であるオランダ商館の長（＝甲比丹（カピタン））は，毎年将軍に謁見（えっけん）するため江戸城に参府し，長崎奉行を通じ『オランダ風説書（ふうせつがき）』という情報誌を提出した。

※**洋学〔蘭学〕**は，実学以外の思想については厳しく取り締まられた。

A　**青木昆陽（こんよう）**（1698 ～ 1769 年）

８代将軍吉宗によりオランダ語学習を命じられた儒学者。飢饉対策として吉宗に甘藷（かんしょ）〔サツマイモ〕栽培を建言し，認められたことも有名。

※吉宗は，キリスト教に関係のない物に限り洋書の輸入を認め，実学を重視した。

B　**前野良沢（まえのりょうたく）**（1723 ～ 1803 年）・**杉田玄白（すぎたげんぱく）**（1733 ～ 1817 年）

10 代将軍家治（いえはる）の頃，西洋医学書『ターヘル＝アナトミア』を翻訳（ほんやく）し，『**解体新書**』として出版。翻訳時の苦労は，杉田玄白が『蘭学事始（ことはじめ）』に記す。

※彼らの弟子が，蘭学入門書『蘭学階梯（かいてい）』を著した大槻玄沢（おおつきげんたく）。

C　**シーボルト**（1796 ～ 1866 年）の**鳴滝塾**

オランダ商館のドイツ人医師が**長崎**郊外に開いた，診療所兼蘭学塾。

※1828 年，シーボルトは国禁の日本地図もち出しをはかり追放される。

※1839 年の蛮社（ばんしゃ）の獄（ごく）で，塾頭の**高野長英（たかのちょうえい）**（『**戊戌（ぼじゅつ）夢物語**』の著者）が幕府に弾圧される。

※高野長英は，**渡辺崋山（かざん）**（『**慎機論（しんきろん）**』の著者）らとともに，**尚歯会（しょうしかい）〔蛮学社中〕**を結成していた。

D　**緒方洪庵（おがたこうあん）**（1810 ～ 63 年）の**適塾〔適々斎塾（てきてきさい）〕**

大坂の蘭学・医学塾。福沢諭吉らを輩出。

E　その他の洋学者

平賀源内（＝発明などに多彩な才能を発揮），志筑忠雄（しづきただお）（＝『暦象新書（れきしょう）』で地動説やニュートン・ケプラーを紹介）など。

５　幕末の思想―和魂洋才（わこんようさい）―

開国後の日本では，儒学や国学に表される「和」の精神を基礎に「洋」の科学技術をもち込み，欧米列強の圧力を避けつつそれに追いつこう，という姿勢をとった。これを**「和魂洋才」**という。

A　**横井小楠（しょうなん）**（1809 ～ 69 年）

肥後国（熊本県）熊本藩士。のち越前国（福井県）福井藩の松平慶永（よしなが）に仕え，和魂洋才の精神を基盤に開国論を唱え，通商や殖産興業による富国強兵を説き，明治維新の土台を築いた一人となった。

B　**佐久間象山（さくましょうざん）**（1811 ～ 64 年）

信濃国（しなののくに）（長野県）松代（まつしろ）藩士。アヘン戦争（1840 ～ 42 年）で清がイギリスに大敗したことに衝撃を受け，欧米に対抗するためには科学技術の導入が必要だと考えた。弟子に，吉田松陰・勝海舟・坂本龍馬らがいる。

※**東洋道徳**とともに**西洋芸術**（＝技術）も学ぶべきである，と和魂洋才を主張し，開国論を唱えた。

※彼は，当時の儒学は自然を実用技術として役立てる点が不足しているので，洋学を取り入れながら，実践的な部分もある本来の儒学を復興すべき，と考えていた。

C　**吉田松陰（しょういん）**（1830 ～ 59 年）

長門国（ながとのくに）（山口県）長州藩士。藩の枠組みを超え天皇を中心とする**一君万民論**を唱えることで，停滞する幕藩体制に一石を投じた。彼は，純粋な心情に徹して己の誠を尽くせば天道と一体になる，と説き，志士たちに尊王の精神を強調した。また，陽明学を修め知行合一の精神をもち，**萩（はぎ）**の**松下村塾（しょうかそんじゅく）**において高杉晋作・久坂玄瑞（くさかげんずい）・伊藤博文（ひろぶみ）・山県有朋（やまがたありとも）らを指導して，陰ながら明治維新の礎（いしずえ）となった。

※西洋の技術を学ぶため，ペリーの船に乗り込みアメリカに密航しようとして失敗した。29 歳で大老井伊直弼（なおすけ）の主導する幕府の対外政策を批判し，安政の大獄（たいごく）で処刑された。

第11講　倫理確認テスト

1　朱子学のうち，京学の祖とされる臨済僧とは？

①　藤原惺窩　　②　林羅山　　③　木下順庵　　④　室鳩巣

2　南学の山崎闇斎が創始した神道とは？

①　伊勢神道　　②　唯一神道　　③　垂加神道　　④　復古神道

3　富永仲基や山片蟠桃が学んだ大坂の町人塾とは？

①　聖堂学問所　　②　懐徳堂　　③　適塾　　④　松下村塾

4　日本陽明学の祖で「近江聖人」とも呼ばれる学者とは？

①　中江藤樹　　②　熊沢蕃山　　③　大塩平八郎　　④　吉田松陰

5　京都堀川に古義堂を開いた古学者とは？

①　山鹿素行　　②　伊藤仁斎　　③　荻生徂徠　　④　太宰春台

6　次のうち，荻生徂徠の著書でないものを一つ選べ。

①　『弁道』　②　『弁名』　③　『政談』　④　『葉隠』

7　本居宣長の師で，『国意考』『万葉考』などを著した国学者は？

①　契沖　　②　荷田春満　　③　賀茂真淵　　④　塙保己一

8　日常生活において，物事に触れたときに最初に生じる素直な感嘆を，本居宣長は何といったか？

①　「仁愛」　②　「ますらおぶり」　③　「真心」　④　「もののあはれ」

9　次のうち，洋学者としてふさわしくない人物を一人選べ。

①　杉田玄白　　②　高野長英　　③　渡辺崋山　　④　安藤昌益

10　次のうち，心学を創始した石田梅岩の著書を選べ。

①　『慎機論』　　②『都鄙問答』　　③　『自然真営道』　　④　『曽根崎心中』

解答

1　①	2　③	3　②	4　①	5　②
6　④	7　③	8　④	9　④	10　②